

# 琉球大学学術リポジトリ

## 琉球と日本本土の遷移地域としてのトカラ列島の歴史的 位置づけをめぐる総合的研究

メタデータ	言語: 出版者: 高良倉吉 公開日: 2009-03-03 キーワード (Ja): トカラ列島, 琉球, 十島村, 中之島, 奄美 キーワード (En): Tokara Islands, Ryukyuan, Toshima village, Nakanosima island, Amami Islands 作成者: 高良, 倉吉, 山里, 純一, 池田 栄史, 赤嶺, 政信, 狩俣, 繁久, 真栄平, 房明, 豊見山, 和行, 鈴木, 寛之, Takara, Kurayoshi, Yamazato, Junichi, Ikeda, Yoshifumi, Akamine, Masanobu, Karimata, Shigehisa, Maehira, Fusaaki, Tomiyama, Kazuyuki, Suzuki, Hiroyuki メールアドレス: 所属:
URL	<a href="http://hdl.handle.net/20.500.12000/9008">http://hdl.handle.net/20.500.12000/9008</a>

# 琉球史から見たトカラ列島に関する若干の論点

高 良 倉 吉

「トカラ列島の島々はちょうど大和文化と琉球文化と重複する地域にあって、大きな意味で言う日本文化をなしており、この両方の伝統文化の流れを見て取ることができます。従って「針の穴から日本を見る」ようでも、その全体を非常によく掴むことができるのではないかと思います」(ヨーゼフ・クライナー「トカラの海から見た日本文化」、『国際海洋シンポジウム／海は人類を救えるか』、1998年、日本財団)

## 1. 本研究の背景と課題

### (1) 琉球研究の動向

一般的に規定すれば、琉球という地理的空間は「沖縄」「先島」「奄美」「大東」の4地域から構成される。「沖縄」は沖縄島とその周辺島嶼群からなり、「先島」は宮古・八重山の島嶼群の総称(近世期の呼称は両先島)、「奄美」(近世では道之島)は鹿児島県下の奄美諸島よりなる。「大東」は南大東・北大東・沖大東(ラサ島)の3島よりなるが、この地域は伊豆諸島に属する八丈島の人々を主体に1900(明治33)年から開拓された歴史の新しい島々である。琉球(研究者によっては「南島」という呼称を好む人もいるが)という広大な海域世界に位置するこれらの島嶼群を対象とする調査・研究は、従来沖縄研究・沖縄学・琉球研究・琉球学・南島研究などと称され、このテーマ追究に取り組む各分野においてすでに膨大な蓄積があり、現在もなお様々な検討が続けられている。

琉球全域を視野に収めた調査・研究は言語学・方言学分野がリードしている。奄美から先島に及ぶ範囲の島嶼を対象とするのみではなく、各島嶼内に立地する住民の生活単位である字・集落(近世で村、古琉球＝中世でシマ)のレベルに至る調査が行われており、琉球方言・琉球語をテーマとするその成果は他に類例を見ない蓄積を誇るまでになっている。これに続くのが民俗学・人類学(文化人類学・社会人類学など)分野であり、各島嶼・字の民俗誌はもとより様々な事例研究・比較研究が書かれてきた。歴史学(文献史学)・考古学は上記の分野に比べると立ち遅れの観は否めないが、近年では琉球全体を視野に容れた歴史論が登場するようになった。

琉球研究の諸分野ではまた、日本本土(沖縄県に住む人々がしばしばヤマトと呼ぶ土地)との関係性を追及することはもとより、周辺アジア(具体的には中国・韓国・台湾・東南

アジア諸国など)との関係性を視野に容れた調査・研究も進展しつつある。特に1980年代以降は多くの研究者がアジア各地に調査のために出かけており、外国(欧米を含む)の研究者と連携する形の共同研究・シンポジウムなども盛んになり始めた。

## (2) トカラからの問い、琉球研究の反省

そのような状況を展望したうえで、琉球研究に欠落した問題が依然として存在するのではないか、との問いを發した時、浮上する多くの論点の中にトカラ列島をめぐる課題が見出される。琉球研究は、明らかに、トカラ列島の存在を無視・軽視することによって成り立っているのではないか、という反省である。

周知のように、トカラ列島の歴史や文化については、徹底した現地調査の成果に基づく下野敏見氏(元鹿児島大学教授・民俗学)の一連の研究が卓越しており、氏の成果に匹敵しうる人文・社会科学分野の仕事はまだ書かれていない。下野氏が中心となり、鹿児島島の研究者・専門家が協同してまとめあげた記念碑的な著作、すなわちトカラ列島の自然・歴史・民俗等の総合的な記述である『十島村誌』(1995年、十島村)が上梓されることによって、奄美地域のさらに北に横たわるトカラの島々は琉球にとっていかなる存在であるのか、という具体的な課題がすでに我々の眼前に浮上してきていた。

『十島村誌』は1,760ページ余に及ぶ大冊であり、第1編で自然環境や社会環境を詳述したうえで、第2編では先史時代・古代・中世・近世・近現代の歴史について詳しく述べており、第3編では下野氏の積年の成果を中心に民俗文化についての豊富な記述を加え、第4編で行政の諸状況を整理している。十島村によるこの自治体史の刊行は、同村の教育委員会の手になる『十島村文化財調査報告』第1集(1979年)、第2集(1980年)、第3集(1981年)、第4集(1982年)の成果をふまえたうえで、新たな調査・研究を行ってまとめあげたものであり、トカラ列島の全貌を提示した画期的な成果であった。人口756名(2000年現在)という小規模の村が、外部人材の助けを借りながら、村の歴史・文化を叙述し後世に伝えたいとする熱意の表れである。『十島村誌』の発刊を契機に、琉球研究の側からトカラ列島の存在をどのように問題にできるか、そのことがすでに問われていたのである。

だが、琉球研究に従事する者の大半はトカラ列島の存在に無自覚であったばかりでなく、その島々を親しく訪れることさえしてこなかった。交通の便や目ぼしい関係資料が希薄であるという理由を挙げることは容易だが、それよりも、トカラ列島を自分のテーマに即して問題にしたいという意識の弱さが、このような怠惰を許してきた大きな原因だったと思われる。

この反省に立って本研究は企画され、実施されることになった。研究課題名を「琉球と日本本土の遷移地域としてのトカラ列島の歴史的な位置づけをめぐる総合的研究」としたのは、トカラ列島が琉球と日本=ヤマトの間に横たわる地理的な境界であることに着目した

うえで、境界としてのそのトカラ列島に「琉球的」な状況がどのように見出されるかを観察したい、との問題意識が初発の時点にあったためである。しかし、調査・研究が進行する過程において、トカラの島々をスタティックな像として固定化して見るのではなく、流動的・可変的な存在として見たほうがこの島々の帯びるダイナミズムにより近づけるとの思いを強くした。したがって、我々の研究は、トカラ列島をめぐる多様な諸相を射程に容れつつ、その歴史的な位置づけや評価に関し、主に琉球の側からの認識を述べることに主眼がおかれるようになった。

研究課題を推進するために、琉球研究において豊富な蓄積を持つ歴史学・考古学・民俗学・言語学分野の研究者を組織し、『十島村誌』の成果をふまえたうえで、とにかく機会をとらえてトカラの島々を直に訪問すること、そのうえで自己の関心に沿ったテーマを見出すこと、調査・研究の成果を共有するための勉強会・ワークショップ等を開催すること、そして各自のアウトプットを報告書の中で提示することとした。

## 2. トカラ列島の特徴と調査の概略

### (1) トカラ列島概観

トカラ列島は、口之島・中之島・平島・諏訪之瀬島・悪石島・小宝島・宝島（以上、有人島）・臥蛇島・小臥蛇島・横当島・上ノ根島（以上、無人島）などの島嶼よりなり、現在は鹿児島県薩摩郡十島村を形成する。臥蛇島は有人島であったが、1970年に島民すべてが去り無人島となった島である。主要島嶼が口之島・臥蛇島・中之島・平島・諏訪之瀬島・悪石島・宝島の7島であったがゆえに、一般には「七島」の名で呼ばれてきた。村役場は1956年に中之島から鹿児島市に移転しており、北接する三島村および沖縄県八重山郡の竹富町とともに行政区域外に役所が立地する特異な形態をとっている。

トカラ列島の特徴の一つは、霧島火山帯の活動によって形成されたその形状の荒々しさにある。各島の面積（最大の中之島で約34平方km）が小さい割には高い山（中之島の御岳で約980m）や切り立った断崖が多く、琉球の島嶼（硫黄島を除く）に比べると全く別タイプの島々といえる。天然の良港が形成される条件は全くなく、大規模な土木工事によって港湾の整備が行われ始めたのは中之島築港（1968年から第二十島丸の接岸が可能となった）を皮切りにもつぱら1970年代以降のことに属する。各島の地表の大半はリュウキュウチクの群生に覆われており、深い森や大木が繁茂できる条件に乏しい。一目観察しただけで、トカラの島々は大型船を建造しこれを係留・格護できる港湾条件に恵まれていないことが判る。

トカラの島々はたしかに、それぞれ目視できる位置関係にはあるが、かといって宝島と小宝島を除けば、近接した一体的な位置にあるわけではなく、トカラというまとま

りのある地域社会を形成するうえでは困難が多いはずである。人口規模の面でも小さく、2000年現在の有人島人口は中之島 183、口之島 173、宝島 119、平島 84、悪石島 80、諏訪之瀬島 74、小宝島 43 であり、過疎化や人口の高齢化が著しい。現在では鹿児島一名瀬間を上下する定期船が運航し各島を結んでいるが、飛行場がなく（民間企業が諏訪之瀬島に整備したが、現在は未使用）、高速交通の利便性に浴する機会はない。

## (2) 調査概略

そのようなトカラ列島に向き合うために、2001年8月、研究代表者・分担者を主体に合同の中之島調査を行うことから本研究は本格的にスタートした。その後は、それぞれの研究テーマに沿ってトカラ列島の各島嶼を調査することはもとより、関係する地域、例えば鹿児島市や三島村に属する島嶼（黒島・硫黄島）、種子島・屋久島・口之永良部島・奄美大島・喜界島などを対象とする調査活動を行ってきた。その意図は、琉球にとってのトカラ列島の課題を同列島に限定することなく、周辺地域を含めた広い視野から検討する必要があるためであった。トカラ列島研究を特定の島々の問題としてではなく、広義の地域史や海域史の問題として扱うために、それらは不可欠な作業だったといえる。

調査の開始に当たって、トカラ研究に多くの蓄積を持つ下野敏見氏や山田尚二氏を囲むミニ・シンポジウムを鹿児島市で、鹿児島大学教授原口泉氏を囲むミニ・シンポジウムを沖縄で開催した。また、研究代表者・研究分担者を中心に協力者・院生・学生を含む勉強会や情報交換会、ワークショップ等を開催し、調査・研究の進捗状況や問題意識の確認を行った。特に2003年12月と2004年1月に行った2度のワークショップでは、報告書作成に向けての各報告と討論を重視した。

以下に、本報告書の総説のつもりで、特に琉球史の立場からトカラ列島をめぐる論点について若干の展望を述べておきたい。

## 3. トカラ列島が内包する論点（1）

### (1) 「通過点」としてのトカラ列島

誰もが気づく点は、琉球に居住する人々にとってトカラ列島は、ヤマト（日本）との間を往還するうえで不可欠な海上交通ルート上の「通過点」として存在したことである。トカラ海域を経なければヤマト（日本）往還を行うことは不可能であり、この海域は航海者にとって必然的に通過しなければならない海上の道だった。

火山活動によって形成されたトカラの島々は高い山を持つために、洋上に行く航海者にとって格好の目印・道標の役目を果たしたはずである。そのいっぽうで、トカラ海域は海の難所として知られていた。茶園正明・市川洋『黒潮』（2001年、春苑堂出版）によると、

トカラの西方を北に向かって流れる黒潮は口之島の北（トカラ海峡）で東に進路を変え、九州東岸の海域を辿り太平洋を北進する。この海のメカニズムに加え複雑な動きをする潮流・季節風などの影響で、トカラ海域は航海者を悩ませる難所、すなわち七島灘の名で知られていた。近世琉球の上国役人の道行きを歌う古典舞踊「上り口説」の歌詞にも、道之島を過ぎ、「七島渡中もなだやすく、もゆる煙は硫黄が島」とのくだりが登場する。トカラ海域はヤマトへ通ずる困難な関門だったのである。

主要な交通手段が航空機に取って代わられるまでは、おそらく古代を含め中世（古琉球）・近世・近代・現代を通じて、トカラは琉球とヤマトを往還する交通上の通過点であり続けた。薩摩に向かう綾船、三千の兵を載せた薩摩の軍船、江戸上りの使節たち、松田道之や柳田国男・伊波普猷・屋良朝苗、戦後の集団就職の青年たち、国費留学生など、琉球をめぐる様々な動向にトカラ列島はいわば道標のような存在として関与していた。

## （2）古琉球辞令書の発給対象外としてのトカラ列島

現時点の情報によると、尚真（在位 1477～1526 年）の治世から薩摩軍の侵攻（1609 年）まで発給されていた古琉球辞令書の対象圏にトカラ列島は含まれていなかった。古琉球辞令書は首里城に君臨した琉球国王の統治権の及ぶ範囲を証明する史料であり、奄美 29・沖縄 31・先島 1 の都合 61 点が確認されているが、今のところトカラ列島からはその痕跡さえ見出せない。奄美は 1609 年の薩摩侵攻後に辞令書圏から割譲され、薩摩の直轄支配地に転換した。

このことは、琉球王国の島嶼領域支配体制が確立する少なくとも 16 世紀以降、トカラ列島はその範囲に含まれていなかったことを証明する。とすれば、16 世紀の琉球王国とトカラ列島の関係、それ以前の段階における琉球とトカラの関係をどのように捉えるべきか、あるいはまた、1609 年の侵攻によって奄美が薩摩のものとなって以降のトカラはどのような性格を帯びる島嶼群になったのか、という論点が浮上する。この問いに琉球史研究は応えなければならない。

## （3）隠蔽政策の隠語としてのトカラ列島

紙屋敦之『幕藩制国家の琉球支配』（1990 年、校倉書房）が体系的に論じたように、トカラ列島は、近世琉球が薩摩・幕府の支配を受けその権力に従属している実態を対外的に隠蔽するための隠語として用いられた。主に 18 世紀の史料から登場するトカラ・宝島は、実際のトカラ列島を指すのではなく、もっぱら薩摩との関係をカモフラージュする用語として用いられた。このために、琉球史の側がトカラ・宝島という虚構性に目を奪われることとなり、実際の存在としてのトカラと琉球の関係性を追究する態度を希薄化させてしまう結果を招いた。

隠蔽政策の実態や特質を追究することの意味は依然として大きいですが、同時にまた、存在

としてのトカラ列島と琉球との具体的な関係を明らかにする仕事の意味も大きい。

#### (4) 琉薩間海運の担い手としての七島衆

例えば、近世の大和船の水主にトカラ出身者、すなわち七島衆が散見される事例を体系的に分析するという仕事はなかなか生まれなかった。琉球側の楷船・飛舟などといった船舶を除くと、近世の琉薩間海運には薩摩藩の認可を得た大和船がほぼ独占的に就航していた。その大和船のクルーとして、七島衆が必要な存在だったことを多くの史料が証明している。

大和船の経営や就航実態、その海運業になぜ七島衆が関与したのか、あるいはまた、隠蔽政策下の隠語に解消されえない琉球とトカラの関係性とは何なのか、この問題を明らかにする課題は依然として琉球史の側の責務として存在する。

#### (5) 漂着地としてのトカラ列島

トカラ列島が琉球・ヤマト往還の通過点であるということは、この海域での関係船の遭難が必然的に起こることを意味する。その事件に対してどのような措置がとられたのか、これの究明は時代状況を考察するうえで好個の事例を提供する。しかし、問題はそのことのみには止まらない。

トカラ列島は琉球同様に、環東シナ海世界の東端の一角に位置する。ということは、この海域世界とその周辺で営まれる様々な諸活動の表現の一形態としての諸船の漂着をトカラは経験することとなる。具体的には中国や朝鮮、日本の諸船舶などがトカラに漂着しているが、このことは漂着船の活動状況を照射するのみならず、その取り扱いを通じてトカラの置かれた状況をも浮かび上がらせることとなる。トカラの船が域外に漂着する史料は必ずしも多くはないが、同様の視点で検討されるべき問題であろう。

### 4. トカラ列島が内包する論点 (2)

#### (6) 「戦争被害」の場としてのトカラ列島

沖縄戦による沖縄住民の被害状況はまさに多様であったが、その中でも被害の象徴的な出来事の一つがいわゆる対馬丸遭難事件（1944年8月22日）であった。九州へ疎開する学童約800名を含む約1,700名を乗せた対馬丸が、米潜水艦ボーフィン号の攻撃により悪石島の付近で沈没し約1,500名の犠牲者が出た。海上を漂流して悪石島その他の島の海岸に流れ着いた僅か227名が生還したが、沖縄戦体験の過酷さを示すものとして人々の記憶に刻まれた。

被害の舞台となった悪石島の名は沖縄県民の間で広く知られているが、その島がトカラ

列島の一つであり、九州に至る通過点であることはさほど知られていない。漂着した生存者を救助し、犠牲者のために慰霊碑を建て供養してきたトカラ島民の美談は折にふれて紹介されるものの、悪石島を含むトカラの存在を身近に意識することは沖縄県民の間で残念ながら希薄のままである。

#### (7) 米軍政下の同伴者としてのトカラ列島

第二次世界大戦で日本が降伏した後、GHQは北緯 30 度以南の南西諸島を日本の施政権から分離し直接統治下に置いた。このため十島（じつとう）村のうち上三島（硫黄島・黒島・竹島）と下七島（現在の十島村）は分断され、下七島は米軍政下に置かれたのであった。7年後の 1952 年 2 月 4 日下七島は日本に復帰し、やがて十島（としま）村となる。軍政期は僅か 7 年間にすぎなかったが、トカラでも日本復帰運動が起こっている。

沖縄戦後史像は、トカラの 1 年後に復帰することになる奄美の問題を十分に射程に容れていないばかりか、トカラの存在を全くといってよいほど念頭に置いていない。したがって、沖縄の「祖国」復帰運動とトカラ・奄美の復帰運動がいかなる共通点あるいは相違点を持つのか、この問題の検討も行われていない。トカラ・奄美の返還＝復帰は、その後にならって継続する沖縄の軍政にとっていかなる意味を持つものだったのか、という論点を含めて早急に検討されるべき課題といえよう。

#### (8) 戦後密貿易の拠点としてのトカラ列島

トカラ列島、特に口之島は戦後初期の段階において密貿易の一大拠点であった。この論点についてはやや詳しく触れておきたい。

米軍政下の沖縄で、様々な形態の「戦果」（軍物資の窃盗・横流し）や闇取引・密貿易が横行していたことはよく知られている。その全体的な政治経済史的背景については琉球銀行調査部編『戦後沖縄経済史』（1984 年、琉球銀行）が内外の資料を駆使して叙述しているが、密貿易等の実態に関してはこれまで断片的な言及があったのみであり、本格的な調査は行われてこなかった。

そのような状況を打開したのが石原昌家『大密貿易の時代－占領初期沖縄の民衆生活』（1982 年、晩聲社）であった。石原氏は与那国島を拠点に台湾や香港、中国沿海地区などにまたがるボーダーレス化した密貿易のダイナミックな実態を聞き取り調査を主体に描き出し、沖縄戦後史像に新たな 1 ページを付け加えた。その中で石原氏は、密貿易の時代、南の密貿易中継基地が与那国島で、それと対極をなす北の中継基地がトカラ列島の口之島だと指摘し、章を設けて「本土・口之島ルートの密貿易」状況を関係者の証言を中心に描いている。その後、与那国島の出身で実際に密貿易に係わった大浦太郎氏の『密貿易島－わが再生の回想』（2002 年、沖縄タイムス社）が出るに及んで密貿易の一端はさらに明らかとなった。



戦後密貿易には奄美諸島の住民も深く関与しており、その状況については名瀬市の女性史研究グループ「さねんばな」の中心的存在である佐竹京子氏が『軍政下奄美の密航・密貿易』（2003年、南方新社）で関係者の証言を丁寧に集めて描いている。その中で佐竹氏は、奄美の日本復帰運動の原点ともいえるべき本土向けの陳情団が密航の形で、しかも口之島を経由して事を果たそうとした経緯を紹介するなど、随所にトカラ列島や口之島が帯びていた役割について記述している。

しかしながら、当の『十島村誌』は密貿易時代のことについて僅かなページを割いているのみであり、しかもその出所は奄美の「さねんばな」グループの成果を要約的に利用しているにすぎない。島の記憶を留める事業としては物足りないと言わざるをえない。

西日本新聞の神屋由紀子記者は同紙の「九州 100年／20世紀との対話」シリーズの一環として口之島取材し、「うらみの北緯30度線」と題するルポルタージュを書いている（同紙2000年1月29日）。「それまで民家もまばらだった口之島の砂浜には最盛期、百軒もの掘っ立て小屋が並び、絶海の孤島は空前のにぎわいを見せた」など、当時の状況を島の関係者からの聞き取りをもとにスケッチしている。神屋記者は口之島の北端セリ岬が密貿易者の間でジャバ岬（ジャバはおそらくジャパンの訛り）と呼ばれていたこと（その岬の辺りが北緯30度）、奄美・沖縄から黒糖や葉菸・HBT・煙草・医薬品などが持ち込まれ、本土からは日用雑貨・材木・食料品などが運ばれ、口之島を舞台に取引されていたこと、島人より密貿易者の数が多かったこと、海岸の集落には玉突き場や遊廓が存在したことなどを紹介している。

密貿易の基地となったのは口之島の西岸、現在も港湾として利用されている西之浜であった。西之浜港で民宿を経営する中ヒデ子（1919年生）さんは、14歳の時に口之島を出て大阪や和歌山で暮らしたが、父が危篤との報を受け終戦直後の1946年夏、初めて一時帰郷した。「闇船を探し、鹿児島、屋久島、口之永良部島と渡って、やっと生まれ島に帰ったが、西之浜は闇船や密貿易の人々でとても賑わっていた」、と語った。ヒデ子さんの弟の仲村重義（1928年生）さんは当時青年団長をしていたが、その頃の様子を次のように語ってくれた。西之浜は小さな漁師小屋が2、3軒ある程度だったが、1946年から闇船の出入りが頻繁になり年々その数は増加していった。東岸の前之浜に面して立地する集落から歩き、西之浜の見える汐見峠に立ち、闇船の出入り状況をよく確認したという。西之浜の一隅には湧き水があり、用水には不自由がなかった。

島民の中には、島に群生する竹材を用いて小屋を建て、それを密貿易者に貸して収入を得る者がいた。舳代わりに丸木舟を貸与したり、あるいは丸木舟を漕いで、それで収入を得る者もいた。青年団の面々は闇船の荷役作業を手伝い、そこから物品や金銭を得ていた。だが、島の人々が直接闇取引や密貿易に参加して、莫大な利益を手にするということにはなかった。「それでも、密貿易の賑わいは口之島にとって大きな収入源だった」、という。

密貿易状況はトカラ列島の日本復帰（1952年）により最終的に消滅するので、口之島に

とって僅か 5、6 年間の出来事にすぎなかったのだが、一時期のこととはいえ、口之島から与那国島に及ぶ琉球・トカラ海域世界が闇取引・密貿易のネットワークで結ばれていた事態は注目してよい。特に琉球史の側から言えば、密貿易時代に先島・沖縄・奄美・トカラ列島が民間活力を通じてネットワーク化されていたこと、そのネットワークは台湾・香港・中国沿海地区・朝鮮半島、すなわち環シナ海世界にまたがるネットワークに連動していたこと、そのようなダイナミックな状況を包摂しうるような戦後史像を構築する課題が横たわることを確認しておかなければならない。

## 5. トカラ列島が内包する論点 (3)

### (9) 「琉球圏」の検討対象としてのトカラ列島

トカラ列島の「基層文化」が琉球文化と共通しているかどうかという問題は、考古学や民俗学・言語学などによる比較分析が不可欠だが、この作業には少なくとも二つの難点が横たわる。一つは、トカラ側の資料が著しく制約されていることである。考古遺跡の全体的な分布調査と発掘調査は限られており、形成されつつある奄美・沖縄・先島の編年概念と対照できる資料に乏しいという事情がある。民俗学・言語学の分野から言えば、下野敏見氏等が行ったフィールドワークの豊富な蓄積があるとしても、過疎化・高齢化あるいは居住者の入れ替えや変容（諏訪之瀬島の無人島化と奄美からの移住者による再生、各島への奄美などからの移住者とその社会の形成など）といった条件が横たわっており、インフォーマント探しがきわめて限定されるという事情がある。つまり、トカラの「古層」を伝える情報が現在のトカラでは希薄だという事情が存在する。

今一つは、トカラの前に差し出すところの「琉球文化」とは何か、という根底的な問題がある。トカラの中から何を見つければ「琉球的」と規定できるのか、試されているのは琉球のほうである、という疑問を確認しなければならない。

この二つの問題を直視したうえで、トカラに琉球を探しつつ、琉球とは何かと、トカラから問われていることを背負う作業が必要となる。

### (10) 琉球史像構築の課題としてのトカラ列島

総括的な問題としては、琉球史像構築にとってトカラ列島をどのように問題にできるか、そのことが基本的な課題として横たわる。この問題の前提として、琉球史像構築にとって奄美をどのように問題とすべきか、課題は二重性を帯びている。この課題の中にはまた、弓削政己氏が『十島村誌』の書評論文（南海日日、1995年12月23日～28日、本報告書の付録に採録）で述べているように、奄美史にとってトカラはどのように問題とされるべきかという問いも当然含まれている。

課題追究の方法としては二つしかない。一つは、とにかく事実認識を積み上げることである。二つは、トカラ列島の存在を絶えず意識し、その島々を多くの研究者が訪ねることである。そこから始めるしかないと思う。

### (11) アジア海域史にとってのトカラ列島

トカラ列島の研究はしかし、琉球・奄美からの眼差し、あるいは琉球とヤマトの関係性からの眼差しに限定されるものではない。薩摩・鹿児島からの眼差し、薩南島嶼史からの眼差しにも限定されない。

トカラという主体をどのように想定するかが基本である。トカラ列島地域史という独自の歴史像構築が常にその基盤になければならない。と同時に、薩摩・鹿児島や薩南の島嶼、あるいは琉球や奄美からの眼差しから解き放たれたところの、東アジア海域史という大きなステージにトカラ列島を位置づける必要がある。そうすることによって、少なくとも九州とその周辺海域から琉球に及ぶ広大な海域世界が、東アジアの変動を受けつつどのような存在として編成されてきたのか、薩摩における領主権力の形成と琉球王国の形成がこの海域世界の編成にどのような影響を与えてきたのか、南北における権力形成とその相互関係が海域世界の島嶼群の位置と役割にどのような変化を与えてきたのか、といった諸問題を検討することが可能となる。琉球史からのトカラ列島への眼差しは、この大きな課題を検討するための一つの切り口でなければならないと思う。

(たから くらよし 琉球大学法文学部教授)